

▶座右の銘は「継続は力なり」。コロナ禍でツアーが中断している現在も週4ペースで四つ木イーグルボウルに出向き、一人黙々と練習を続けている



ギネス女王・斉藤志乃ぶの “私のボウリング人生” —前編

「若いころはけっこう いい加減な性格でしたね(笑)」

海外での2勝を含む通算74勝は、かのギネスブックが認定する女子プロ世界最多勝記録。日本が誇る世界の女王・斉藤志乃ぶプロは古希を過ぎ、グランドシニアとなった現在も年間10大会前後のレギュラーツアーに出場し、元気な姿を見せてくれている。彼女の全盛期を知らない若いボウリングファンのために、その偉大なる足跡を、本人とともに今一度振り返ってみたい。



◀昨秋の「ラウンドワン グランドチャンピオンシップ2019ファイナル」グランドシニア部門準V当時の志乃ぶプロ(11月9日、ラウンドワン南砂店)

さいとう・しのぶ / 1948年9月5日生まれ、群馬県出身。161cm 57kg、右投げ。71年プロ入り(3期・ライセンスNo.64)。通算74勝(米国での2勝含む)。公認パーフェクト3回。㈱アメリカンボウリングサービス(ABS)所属。

肘の故障が転機に

志乃ぶプロが学生時代(群馬・太田女子高-日本体育大学)、やり投げの選手だったことはよく知られた話。群馬県下ではトップクラスの記録を有し、インターハイやインカレ、国体など学生アスリートの晴れ舞台で活躍した。

ボウリングとの出会いは、本人曰く「たしか高校2年のとき」で、西暦でいえば1965年(昭和40年)。ブーム前夜、群馬県にもボウリング場が複数誕生したところだ。

友だちと遊びで投げ始めたころは、ガターもするし、うまく投げられなかったから「ボウリングはつまらない」と思いましたね。ボールに力はあるんだけど、レーンの上をうまく転がってくれない、みたいな(笑)。

でも、遊びで投げている女の子の中にも、上手な人がけっこういたんですよ。「あの人にできて、どうして私にはできないんだろう？」という悔しい気持ちがあって、大学に進学してからも投げに行っていました。



▲学生時代はやり投げの選手として活躍(写真は高校2年時の群馬県春季大会)

大学時代に通ったのは、腕達者なボウラーが大勢投げにきていた世田谷オークラボウル。そのなかには、彼女のボウリングを見て未開花の素質に気付いた“目利き”の人間もいた。

大学1、2年のころ、オークラボウルには社長の大蔵満彦さんをはじめ、JBCで活躍していたアマチュアの選手がたくさんいました。そういう人たちが「こいつ、力がありそうだな」と思ってくれたのか、いろいろ親切に声をかけてくれるなかで投げる環境にあったんです。リーグ戦にも誘われたりして。

ちょうどそのころにやり投げで肘を痛めたこともあって、本格的にボウリングをやろうと考えるようになりました。

そんな折、69年5月に女子プロ1期生13名が誕生。進むべき道が明確になったことで、自身もJBCの群馬県連に入会し、より一層ボウリングに打ち込むようになる。腕前も上達の一途をたどり、一度JBC主催のリーグ戦で優勝したときのアベレージは200を超えたという。

そのとき学生だった長原京子さん(2期)が、都連の事務局で各支部から上がってくる記録を管理するアルバイトをしていて、「女子で200アベなんて凄い！」と驚いたそうです(笑)。

本格的に始めて1年足らずでしたが、大学3年のとき、力試しのつもりで私も2期のプロテストを受けました。1次の最終日までいったけれど、64ピンぐらいり足りなくて不合格。ダメ元で受けたのにガッカリして、それから半年くらい投げなかったですね(苦笑)。

70年8月、1期生の中山律子プロがTVカメラの入った東日本月例会の優勝決定戦で女子プロ第1号のパーフェクトゲームを達成。爆発的なボウリ

ングブームが到来するなかで、ようやく気持ちが前を向いた。

「もう一度ちゃんとやろう」と思って、当時オークラボウルにいた奥伸一プロ(6期/2007年病没)に基本から教わり直しました。それで大学を卒業した年に、3期のプロテストを受けたんです。

半年間の猛練習のかいあって、今度はみごと合格。本人の努力の結果であることは間違いないが、「カラダの使い方は同じ」というやり投げで培った強靱な足腰と集中力がモノをいったこともまた確かだろう。

5年目で20勝達成

デビューイヤーはブームの絶頂期。新人プロが参戦できる下半期のツアーだけで36大会もあり、志乃ぶプロは9月のダリア杯、12月の全日本クイーンズを制して早くも両目を開ける。

翌72年は51大会で5勝、73年は32大会で3勝を挙げ、3年目で早くもV10に到達。そのうちの1勝は国内最高峰のタイトル、全日本女子プロ選手権での初勝利だった。

「新人時代は1期生の背中を夢中で追いかけていた」と志乃ぶプロ。だが、いちばん憧れていたのは“花のトリオ”(須田開代子、中山、石井利枝)の3人ではなく、女子プロ野球出身の海野房枝プロだという。

ボウリングへの向き合い方や普段の言葉遣い、後輩を叱咤する様子など、プロとしての姿勢を尊敬していました。海野さんを尊敬しているというだけで、私に対するほかのプロの見方が違ったみたいで、先輩方にはけっこう可愛がってもらいましたね(笑)。

ただ、私自身はまだプロとしての責任感もなかったですし、気分にも波もあった。優勝はしていたけれど、予選落ちした試合も相当ありました。今日はダメだなと思うと、途中で試合を投げちゃう。若いころはけっこういい加減な性格でしたね(笑)。

それでも勝ち星は順調に積み上がっていった。74年は28大会で4勝、75年は23大会で6勝(全日本V2含む)と、わずか5年で20勝を達成。73年秋の、いわゆる“オイルショック”を契機にブームが衰退し、大会数が年々減少するなかで勝率を上げていったのは、やはり「モノが違った」ということだろう。

昔のことはあまり覚えていないけれど、長原さんが私のことをよく覚えていてくれて(笑)。彼女が言うには「志乃ぶさんのボウリングは、私たちのボウリングと全然違って」と。「やり投げで覚えたカラダの使い方が、スイングだとか最後の指の立ち具合にまで反映して、たぶんすべてがほかの人と違っていったんだよね」と、よく言っていました。記者さんたちとは違う視点で私のボウリングを見てくれていましたね。



▲「1期生の背中を夢中で追いかけていた」若手時代、ボウラーズベンチで須田開代子(95年病没)、中山律子両プロと語り合う

ゴルフ転向も考えた

76年、女子プロの大会数は13にまで激減。同年は志乃ぶプロも1勝に終わ

る。業界がズドンと落ち込んでしまったこの時期、志乃ぶプロはどんな思いでいたのだろうか？

大会が減ってヒマになっちゃったとき、ゴルフを始めたいんですよ。JBCにすごく上手なアマチュアの男性がいて、その人たちと一緒にラウンドしたり。私も割と上達が早くて、正直「ボウリングを辞めてゴルフに行こうかな」と思ったこともありましたが、でも「今さら下積みから始めるのは無理だな」と(笑)。

改めてボウリングに向き直った志乃ぶプロは、さらにハイペースで勝ちまくっていく。77年は全13大会で入賞し、全日本V3を含む3勝。78年も3勝(15大会)し、79年(18大会)は全日本V4を含む4勝を挙げて通算30勝を突破した。

当時の最大のライバルといえば、優勝決定戦の舞台で幾度も迫真の好勝負を繰り広げた後輩の杉本勝子プロ(4期)だろう。

杉本さんは私と好対照のタイプで、対戦するのが楽しかったですね。私もポーカーフェイスというわけではないけれど、闘志をムキ出しにしてくる杉本さんに対して「あっちが動なら、こっちは静でいこう」と、逆に自分のスタイルを意識していました。「シラ〜として投げれば、向こうはカッカするだろうな」とか、そんなことまで考えながら投げていた時期もありましたね(笑)。

翌80年は国内で1勝(15大会)にとどまるも、本場アメリカに遠征して1勝(エボナイトオープン)し、10年間の通算勝利数は33に。しかし翌81年、志乃ぶプロは11年目にして初めてシーズン未勝利の屈辱を味わうことになる――。

(以下次号)